

3 医師の決断

いわき市立総合磐城共立病院の医師齋敏明さん(画)は、専門が血液内科。日ごろ接する患者のなかには深刻な血液の病気を抱えている人もおり、手当てを尽くしても救えない命もある。

「一市民として骨髄液を提供し、移植を待つ人たちの役に立ちたい」。齋医師はそんな思いを胸に秘めて一九九〇(平成二)年、骨髄バンクにドナーとして登録を行った。

このころは、全国組織の公的骨髄バンクはなく、齋医師は日本で最初に発足した民間の東海骨髄バンクのコーディネーターを務めていた。その役目は、ドナー登録者の骨髄提供最終確認に立ち会うことなどで、現在は全国骨髄バンクの専門担当者が務めている。

また、いわき市内では、白血病患者と家族を中心に、広く市民も含めて「公的な骨髄バンクの設立を」という、全国でも有数の広がりのある公的バンク設立活動も始まっていた。

五年後の九五(同七)年のことだった。バンクの事務局担当者から齋医師に電話があったが、受話

先駆けたドナー経験

器の向こうから告げられたのは、いつものような事務的な連絡ではなく「先生がドナー候補になりました」との思いがけない一言だった。

「宝くじにさえ当たったことがない自分がまさか」。驚きの感情がまず押し寄せたという。

コーディネーター役の医師がドナーになったため、別の医師がコーディネーターを務めることになった。

のちに同じようなコーディネーターの医師が骨髄を提供するという例もあったが、齋医師はそれらに先駆けることになった。

仕事の合間を縫って仙台市の東北大付属病院で事前の検査をしたが、医師としての経験や知識があり、骨髄の提供に不安はなかった。「仕事の面はどうか不安だろが、交通事故に遭わないようにと気を使いました。普段は二合のお酒を一合に、そして横断歩道では、黄色の信号では決して渡らな



コーディネーター医師でありながらドナーにもなった齋医師。骨髄提供への正しい理解を訴える。

コーディネーター一転提供する側に

いようにしました」。冗談を交えながら、齋医師は当時を振り返る。バンクの支援活動をしていた妻の京子さん(画)も心から応援。骨髄液の採取は無事終了した。「患者さんがその後どうなったかは気になるところですが、知らされないことになっています。退院後しばらくは腰の痛みはありましたが、さすがにいい気分でしたね。入院していたのは三泊四日。夜が長かったことを覚えています」

ドナー経験を経た齋医師は現在も、全国の骨髄バンクを運営する骨髄移植推進財団の調整医師として、骨髄提供者の検査などを行っている。

このうえで「以前と比べて、ドナー登録者数が増えたのは良いことですが、コーディネーター中にキャンセルするケースが増えています。検査に時間がかかったり、骨髄採取への理解が不十分で恐怖感を抱くという問題もあります」と課題を指摘。「ドナーになった人たちの声を広く知らせ、骨髄提供に理解を深めていくことなども大切ではないでしょうか」と訴える。